
霊犀

秋野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊犀

【Nコード】

N8339A

【作者名】

秋野

【あらすじ】

九能谷という田舎町で電車を降りた青年は、散策のうちに美しい古い洋館、持ち主の美しい青年に魅せられる。次第に古い九能谷と呼ばれる土地と歴史に深く関わっていく。

第一話

九能谷には、正午過ぎに着いた。

目的地が九能谷にあったわけではない。本線が九能谷を終点にし先がないのであって、次の電車が二時間後だというから小さな田舎町だが、観光でもしてみようかと改札を出たのが事の発端だった。車窓から眺めていた時は、人生の終着と始発の土地はこんな感じであろうかと見詰めていたのだが、実際降りて間近に見ると現実的で味気ない。

駅からの中央通りは緩い下り坂になり、由緒ある結構な繁華街。昔ながらの町家が軒を連ねている。

しかし駅前から脇道に入り、数分路地を歩いた時分には、既に町全体の郷愁に誘われた。町全体を包む空気は、何時かの夢に似ていた。

いつその町に住んでみようか。一ヶ月程度でも良い。そういう気にさせられる。数日住んで気に入らなければ、また電車にのれば良いのだ。

夏の名残の蝉の声が、空高い雲を彩る。直継はビジネスホテルに数日の宿泊予約をし、何軒か不動産屋を見回った後、古い屋敷街を見つけた。

土塀が延々と片側に続き、その脇を用水が流れる。家の裏は杉林で、その背景は黒々とした山林。道の両側にも杉の木が聳え立っており、アスファルトの舗装はなく、地面から立ち上る熱気に眩暈することもなかった。

第二話

その時、直継には特に明瞭括弧たる目的があつたわけでもなかった。一瞬此処での生活に漠然とは惹かれたが、家を借りる必要に迫られているわけでもなく、短期滞在の決心がつくまでといった感じで散策していた。

手頃な物件があれば、住むのも良い。その程度の心持だった。

武家屋敷の端まで来た時、左手、方角で言えば南東に、洋館の屋根が見えた。

何とはなしに、目を奪われる。

直継は、ふらふらと誘われるように細い小道を木立に沿って、其処を目指した。

車が辛うじて通る程度の道幅、雑草が生い茂り、踏む土には小さな白い花を咲かせているものもあった。

近づけば近づくほど、その洋館は直継を魅了する。

入り口部分が重厚な洋館、奥は日本家屋の構造となっている立派な洋館で、玄関右手にある樹齢五十年にはなるだろう椎木、大きな石柱のある玄関ポーチ、ステンドグラス、そこまで続く三段ほどの石畳が在った。西側へと純和風の母屋。そして母屋には大層な日本庭園。古びた灯籠は荒れて傾きかけていたが、隣には枝が直角に曲がった立派な松が生えている。

何にもまして見事なのは、地面を覆う鮮やか海松色の苔。

西洋風の扉の前には張り紙がしてある。

『入居者募集。 氣に入られた方は、此方まで』

紙は日に焼けて、何時のものかわからない。下に電話番号と、簡単な地図が墨で書かれていた。

悪筆と言えば悪筆だったが、地図はわかり易い。武家屋敷通りの前に並ぶ町家、交差点の角から三軒目が黒く塗りつぶされている。

この近くだ。直継はその張り紙を剥がした。

第三話

紙を手に来た道を向き直り、盆地となる街を見下ろす。脇には、湧き水がちよろちよろと流れている。山が直ぐ裏手に迫り出しているのだ。古いゴシック教会のように、背の高い杉から天日が滲がれる。

素晴らしい立地だ。何度も振り返りながら、再び元の通りへ戻る。淡い土色の壁に甘く心に響き、妙に懐かしげだった。初恋の乙女の顔を影から盗み見ている気分だった。そして、初心な少女が悩ましげに此方に目配せしているかの如く、洋館の方も誘う。

直継は、後ろ髪を引かれながら元の屋敷街に戻った。

地図を手に通りを進むと、指し示された家は朝顔の鉢が三つ並んで置いてある素朴な土間で、戸は開け放されていた。直継は暗い土間に向って声をかけた。

「ごめんくださーい。すみません」

すりガラスの戸の向こうから、年配の男が顔を出した。小さくテレビの音が聞こえる。野球でも見ていたのだろうか。

「その林の洋館、見せて貰えますかね」

男は顔を引つ込めてから後、うおっほんと仰々しい咳払いと小さな返答が聞こえてくる。

「あいあい、あいよ。ちよいと待つとくれ」

不恰好に腹の出た男は、つつかけを履いて土間に降り、錆付いた古い鍵を掌に押し付けた。

「あの家だね。兄さん、自由にどうぞ。鍵は夕方までなら何時でもええ。あんた、九能谷は初めて？」

老人は「くがや」と発音した。たしか『九能谷^{くのや}』だと思ったが、土地の人間はそう発音するのだろうか。

「はあ、そうです」と曖昧に返答し、小さい老人の胡麻塩頭を一瞥する。この老人が家主ではなさそうだ。

「ここらで家でも探してるんかね？」

「ええ。まあ」

美術的価値がありそうだから内部を見せてもらいたい、そう思ったのだが、曖昧に誤魔化す。仔細に身上を言及される前に、と先手を打って話題を振った。

「ちなみにお幾らぐらいなんでしょうか、あそこは。一ヶ月のお家賃」

庭付きの家の家賃の相場は解らなかったが、興味本位で尋ねてみる。

「十万ぐらいってえ、話だけれど」

直継は目を剥いた。その額なら、と欲が出る。

「どうしてそんなに安いんです？何か曰く付きですか？」

老人は「いやね」と言葉を続ける。

「誰んでも貸すわけじゃねえ。まあ最も、あんな手の掛かる家、よっぽどの物好きでもなきやあ住まねえさ」

そうしてうつて変わって眼を輝かし話し始めた。

第四話

「ちよいと家主が幾分変わり者でさあ」

「変わり者？」

「ええ。あん建物は、明治まで辿れば伯爵か子爵かつう大層なお嬢様の嫁ぎ先か何かの別邸なんですがね。まあ、その辺は、調べりや詳しく解るンでしょうが、ええと何でしたか、西井という家です。でも、その家、戦後のどさくさに土地やら無くして負債も抱えましてね。まあ、若い方はそんな時代知らんでしょうがね。調度やら株券やら土地も全部売っぱらっても、まだ借りが残るぐらいでさあ。高利貸しにでも、騙されとったんですかね、まあ何にしても、戦後十年で一文無しになりました、一家はばらばら、縁故ある家に子供達を預けたとか」

遠慮のない老人の話は、どうにも作り話のようだ。しかしあの家の佇まいに似合う、風雅な話だ。

「今も血縁の方があの家を管理されているのですか？」

「はあ、まあ。お孫さんの名義にはなっておりますよ。あれだけ何やら税務署から逃れましてね。ただまあ、ちよつと変わった人でして。そこン通りの端に一間借りて、陶芸をやっておりますがね」

老人は家の中に向って指さす。

「へえ、陶芸家なんですか？」

老人は熱心な直継に、立ち話もなんだと、土間の縁を薦める。

直継は、遠慮がちに腰をかけた。

「恐らく。まあ、暮らしぶりは苦しいらしいですわ。あの土地使えば月に幾らも入ってこように、首を縦にはふりやせん。義理堅いというか、まあ、単なる変わりもんですわ。今となつてはあんな田舎ン土地、古びた洋館なンぞ趣味人にしか好まれませんし、上にマンションでも建てた方がよっぽど利益が得られると薦めたんですがね、住む気はねえ、売る気もねえ、ってことで貸したらどうかと。そし

たら貸し手にすら文句をつけるばかりでして。文無しになつても、意固地なもんですわ。華族つつうのは解らねえことばかりでさあ」

「その人に会えますかね」

家の興味もあるが、波乱の人生を歩んだその持ち主に沸々と興味が湧く。

「はあ、はあ。あの家借りなさるんならね、お伺いたてねえと。あんたさんなら、気が合うかもしれねえなあ。そんな気がしますよ。あんた、兄さん、何してる人かね？」

老人は老眼鏡を少しずらして、直継の顔を見詰める。

第五話

「小説家の端くれです」

「小説家、へえ、そりやおったまげた。それで飯は食えるのかい」
芝居じみた声を出して、初老の男は驚く。

「無理ですよ。親が金満家でして、面倒見て貰っているわけです」
老人はそうかい、そうかいと壊れた玩具のように首を縦に振り、
「夢を叶えるつうのは、難儀なことですよ」と、そうのたまわった。
直継は咄嗟に詰まり、溜まった唾を嚥下する。

じわじわと忘れていた罪悪感が這い上がってくる。『小説家』と
言っているものの、小説など書いた試しはない。尤も目指している
わけでもない。目の前には黒々と口を空けた空っぽの生活。

罪悪、否、もっと荒涼とした寂寞とした情けなさ。そして、人生
に対する諦観。

「この時間なら居るかな。居らんかもしれないけど、行ってみると
いい。家借りたけりや、この人の了解つつうのが必要でね。わしに
は何とも。裏の商店街の端つつうても、兄さんにはちよいと解りに
くいかね。今は饗庭って名前でね」

老人は土間の脇の筆笥の上のメモを契る。そこに先の丸い鉛筆で
筆圧の薄い地図を描く、四角、四角、棒……ひよろひよろと流れる
炭の線が、何やら不安にさせた。

「これで、解らねえかね。案内しようかね」

メモを広げた瞬間、暗いすりガラスの向こう、テレビの歓声がわ
あと聞こえてきた。老人の気が漫ろになる。

「いえ、結構です。お世話様でした」

「鍵は誰もおらんんだら、その郵便受けでええ」

直継はメモを受け取り、軽く頭を下げ、その場を辞した。

第六話

同じ道を戻り、再び古い居館を門前で見上げた。門の柵は錆び傾いている反面、建物は堅固なものだ。洋館部分は二階建てか三階建てで、高く聳え建っている。対照的に瓦の母屋はぐんと低くなる。背後に見えるのは杉だろう、朽葉色の屋敷の外壁を引き立てていた。上棟から見える木は家屋の二倍程があり、覆い被さるよう影をつくる。数段石段を上ると正面に大きな紫檀か何かの木扉が現れる。扉の開口部は、土と落ち葉で荒れていた。

半円アーチの玄関ポーチは、小さいながら個人邸宅とは思えない重厚な造りで、扉の表層の細工にも意匠が凝らしてあった。

鍵を差し込むと、ギギと鈍い音がして扉が開く。

室内の空気は、白く霞んでいた。

足を踏み入れたその場所は、外から見ると六角形に見えたが、中で数えてみると八角形の板間で、三階まで吹き抜けになっていた。上からは葡萄をモチーフに詠えた照明が下がっている。寄木の床、壁は漆喰、柱から天井にかけて、植物や動物などの繊細な浮き彫り彫刻が施されている。建主は趣味人だろう。

午後三時を過ぎて少し紅帯びた陽の光が、二階のステンドグラスの窓から零れ落ちる。

向って左手に次の間に続く扉がある。其処は丁度十数畳の広さの部屋で、暖炉があり、バルコニーがあり、入り口から反対方向にあたる洋風の庭がある。恐らく此処が応接間だろう。

脇には二階にあがる階段があり、二つ扉が見えた。

再び、大きな扉。

其処から家は一転して純和式となる。

粹にも二つの結合部分は小さな六角形の床板が嵌め込まれており、和洋混交の装飾画が四つ掛けられている。全体の六角形の一つの辺から繋がっている木造の廊下は、一間ほどあってから客間から居間

へと続く。居間の隣が小さな一間、土間、書院、そして奥は女中部屋だったのか小さな部屋が幾つか。

洋館部分でなく、奥が生活空間だったことが解る、着物の擦った後の残る光沢のある床。

埃は積もっているが、綺麗なものだ。老人は数十年人が住んでいないと云っていたが、少し掃除を忘れた程度にしか見えない。

第七話

老人に別れ際の言葉を思い出す。

『すまんなお兄さん。手が空いたらでええんだがね。ちょいと雨戸開けておいてくれんかね。ここ半年風通してなくてね。御手数だつたらええんだが』

雨戸も開けていないから、畳が腐っているだろう、そう言っていたがイ草の腐った匂いはない。

それでも、とガラガラと雨戸を開くと、美しい庭が顔を覗かせる。濡れ縁に立つと来る時に見た灯籠が松の陰から顔を出す。

内側から見た方が、庭は構図が良い。曲がりくねった石の道は、池の名残だろう。手前に石橋、奥に築山が見えた。

再び庭を取り囲むように廊下は続く。奥の間は寢室に使っていたのであるう、二間続きの和室で、釘隠は珍しい薔薇だろうか、西洋花。襖の下にはギヤマン硝子が嵌め込まれている。狭いが杜若を模した美しい欄間、揃いの屏風絵が艶やかだ。諸所に西洋のものを取り込んでおり、それが趣を副えていた。

全体的に武家屋敷のように重厚で重みがあつた。しかし所々たおやかな趣がある。

二階へ上る箱階段は、居間だろう土間の横の八畳の奥の解り難いところにあつた。一段毎にみしみしと鳴る。

二階は一階に比べ、小さな町家風情といった様相。階段を上がった間は片側が壁、片側が襖、正面が窓の六畳半。廂の低い窓の雨戸も開けると、そこから丁度、九能谷が一望できた。中心街は擂鉢状の盆地になっており、その中心に駅があるのがよくわかる。

直継は窓から離れた。

階段のあるその部屋は、窓と隣に襖がある。納戸だろうかと何気にするすると襖を開くと、現れた光景は面妖だった。

——何だ、ここは。

狭い四畳ほどの部屋。香でも焚いていたかのような鼻につく強い匂い。生活臭といった染込んだ古い匂いだ。たった今まで誰かが居たような妙な暖かさ……それを証明するかの如く、土壁は茶色く煤けていた。

着物掛けが四つ、部屋の四方を取り囲み、藤色、浅葱、薄紅、山吹の友禅が掛けられている。

四角に区切られた中央で、まるで呪術を行ってでもいたかのような。

直継は息を呑んだ。額から脂汗が湧き出てくる。

まるで何かが息づいている、妙な鼓動を感じた。

第八話

ここ数十年、殆ど人が住んでいなかった、老人はそう言った。しかしこの部屋は、たった今まで人が生活していた様だった。

その時、がさつと庭で音がした。開け放された雨戸の下、庭の松の木陰、白く何かが動く気配。

何かがいる。思わず脇の窓から、身を乗り出した。

それから何かがトントントンと、板間を歩く小さな音。

妙なものが家の中に入ってきた。

ヒタヒタヒタ……

白昼の靈気。

背筋にぞつとしたものが走り、直継は暗い箱階段を滑るように降りた。

白い影を確かめようと思ったわけではない。濃厚な家の空気から逃れたかった。

眼の端、浴衣のような、襦袢のようなものを着た影。一階の奥座敷に向かう廊下の奥。

此方には気付いてない様。ただヒトではないのが解る。小さ過ぎる。

寒気が纏わり付く。

先程開け放した雨戸の隙間から庭へと転がり落ちた。

庭に下りると一転、何事も無かったかのように、長閑で静かだった。小鳥の囀りが聞こえる。近くには清流の調べ。

木陰は深いが、眩い木漏れ日きらきらと庭を照らしている。妖気はない。全く平穩無事な世界。

今のは幻覚だったのか。

直継は裸足のまま、呆気に取られて、四辺を見渡す。どこにも異

変はない。

只、足元には白いハンカチが落ちていた。女物だろう、白練の色も瑞々しく美しく、小花の刺繍がある。

どこかに洗濯物でも飛ばされたのであろうか。しかし直継は何気なくそれを拾って、ズボンのポケットへと突っ込んだ。

陽気に当てられ暫く呆けていたものの、二階に戻る気にもなれず、ぼんやりと窓を見上げた。雨戸が少し空いている。今、直継が開けたものだ。

眼を凝らしたが雨戸の影で、仄暗く何も見えない。

開けた雨戸は閉めなくてはならない。さすがにこんな空家の二階でも無用心だろう。

解ってはいても、再び家に入る気がせず、暫し庭でうろつる円を描いていると、空が翳ってきた。雨雲だ。

ぽつりぽつりと額に雫が落ち始める。

——早く帰らないと。

第九話

にわか雨に背中を押されて、軒に戻る。そして勇気を奮い立たせて、薄暗い座敷の奥、狭い箱階段を駆け上った。

静まり返った二階、薄らと隙間から暗雲の翳り。

先程より禍々しい気が充満している気がした。開け放したまま飛びのいた隣の部屋は暗く、階段から頭を出した限りでは何も見えなかった。隅まで仄明るいのは、何の仕業か。

——ええい、ままよ。

直継は二階の六畳の間を横断すると、廂に駆け寄った。白昼堂々、そんな恐ろしげなことが起こるわけがない。

雨戸を力任せに閉め、ガタンと門を下ろすと、部屋は元の暗闇に戻る。

——そうだ。そうだろう。何もおこりやしない。

直継が額の汗を拭い胸を撫で下ろしたその瞬間、床を歩く音が耳を掠めた。

先程着物が掛けてあった隣の間だ。誰もいなかった隣の間から小さな物音。ポツと何かを点す音。

冷たくて固いものが歩く音。畳みが軋む。何かが歩いて、そして襖が動く。

………するする

「ひっ」

直継は声にならない悲鳴を上げた。

一目散に階段を駆け下り、玄関へ向って走る。ほんの一寸も、家の空気を吸いたくなかった。

何かの氣勢は未だ色濃くあったが、二階ほどではない。何も考えるまい、そう決意しながら、木張りの床を通りぬけ、玄関のところに脱ぎ捨てた靴を拾って、錆びた鍵穴に鍵を差し込む。

ドアが閉まり、淀んだ空気から開放された。ほっとした瞬間、

南無阿弥陀仏』と口を継いで零れ落ちた。

するとぼとり。雫が顔を濡らす。ぽつりぽつりと雨脚が伸びていった。

——夕立だ。

雨雲は空一面を灰色に変え、遠くでは雷鳴が唸る。晩夏特有の変わりやすい天気、九能谷も襲った。

第十話

頭上には激しい雨が叩きつける。冷静になつてみればみるほど、一時前に見たものが何か解らなくなる。直継は自分が何に驚いたのか、何を恐ろしいと感じたのか、何もかも柔らかい布の包まれて消えてしまうのを感じた。一步一步踏み出す毎に恐怖が拭われていく。妙な心地だった。

無理矢理心を空にされたようで、心許なくなつて、雨に打たれたまま洋館を振り返る。

朽葉色の壁は、雨水にしつとりと色香を放っていた。水を滴らせた適齢期の乙女の項のように、見る者の心を奪つて放さず、恐ろしいことがあつたという記憶を掻き消し、再び内へと誘う。

暫く木立で、夕立が通り過ぎるのを待とうとしたが、雨脚は強まるばかりだった。髪を伝う雨水が唇から口の中へと注ぎ込まれる。

ずぶ濡れになりながら鍵を返しに屋敷街へと戻ろうとしたその時、家の持ち主である華族の末裔の話を思い出す。ポケットには老人の描いた地図、その時、直継は誰かに全て洗い浚い話してしまいたい気分になっていた。

軒下でちらりと見た地図は、的確に裏路地を描いていた。商店街の方へ脇道を抜け用水路の脇を通り、陶芸家の家を目指す。

地図の黒く塗りつぶされた場所には一件、煌々と電灯の燈つた店があつた。外は昼間なのに暗くまるで夜のようなので、一筋の光が暗がりの雨の中、伸びる。直継は店に飛び込んだ。

プレハブのような簡素な店内。壁際に素っ気ない木の棚が作り付けられ、そこに白練の優しい色の陶器が数十個並ぶ。どれも同じような形をした、少し深い椀だ。茶器だろうか。

誰もいないのかと見渡すと、壁際に、パイプ椅子が一つ。色黒の、年の頃四十代といった男が本降りとなつた窓の外を見詰めていた。

田圃焼けだろう真っ黒に焼けた肌、学生が着るような安いＴシャツ、それに短パンを合わせている。男は微動だにしないので一瞬気付いていないのかと思ったが、南方系の彫りの深い顔立ちの茶色の小さな目は確かに直継の姿を追う。

「降り出しましたね。まあゆっくりと見ていってくださいよ」

その言葉は、直継自身に向けられたものだとは思えなかった。それ程此方に関心がないように見えた。

男の、画廊のオーナーという風でもなく、芸術家という風貌でもない容姿を凝視してしまっていたらしい、直継は一端眼を叛け、

「嫌な雨ですね」

と続ける。すると男は、再び通りに視線を移し、

「ずっと嫌な熱と雲気が立ち込めておりましたから。こういう日は雨に流して貰った方がええらしいです」

と、返してくる。

「はあ」

再び沈黙が支配する。男はレジ台においてあったスポーツ新聞を手にする。直継は場が持たず、何の目的で来たのかすら忘れて、ずらり陳列してある陶器を見回した。

第十一話

奇抜な色形の物はなく、どれも素色で丸い菓子鉢、その美しい曲線は柔らかな印象を醸し出していた。雨に濡れ冷えた身体を温めてくれるような風合。

端に作家のプロフィールが載せられている。『饗庭 巽』。その名に直継は、漸く目的を見出した。

「すみません」

男は顔を上げた。

「この方に会えますか」

怪訝に眼を細める男に、慌てて付け加える。

「その洋館の持ち主だと聞きました、饗庭さんとおっしゃる方、此方に？」

合点がいったという風体で、男は何度も頷いた。

「なるほどなるほど。居りますよ。ええ、あんた、あの館に興味が御有りで」

男は笑った。にやという擬態語がぴつたりとくる笑いで嫌な気分になせられるが、独特な顔立ちの所為だと思い直す。

「興味というか……変わった家なので。古いですよ」

先程の事をどう口にすべきか解らず、直継は男の出方を待った。

男はにやにやした笑みを浮かべたまま、言葉続ける。

「古い家ですよ全く。元は立派な家だったんですが、表側をあんなにしちまって。アレが良いって方もいらっしゃいますがね。俺はどうにも好かなくなっ」

「あの、華族の方の別邸だったとか聞きましたが、どんな」

すると意気揚々、男は直継の言葉を遮って話始めた。

「いやいや、華族つつうても旦那の方は違いますよ。西井って旦那、元は商人。一代二代で財を拵えましてね。隣町に大きな御屋敷を構えて、ま、大したもんですわ。御新姐さんは、元は華族の出

身。でもそんな成り上がり者が、華族のお姫様と釣合う筈がない。

結局、上手く行くの行かないのって、そのうち、旦那さんは方々に借金を拵えて、芸者も困って早死にしたもんだから、さぞ、御新姐さん方は悔しがったでしょう。遣された姐さんが、ひっそりと晩年過ごされる姿を見るのは忍びなくてねえ。俺の子供の頃んことです。姐さんは、年を食っても綺麗な方でした。あの広い家に使用人も置かずにはつんとね。まあ、あの表の洋館は大胆那の趣味で、洋風かぶれつつうんでしょう。不恰好で怪しいもんです。それに、あんな風に何十年も空家でしょう？無用心たらありやしない。嫌なもんでも住み着きますよ」

「嫌な物、ですか？」

ぞわぞわと背後が寒くなる。男は肩を竦めた。

「俺はそういうのはとんとわからないんですがね。知人のそう言う人はね、空家は拙いと言います。こういう御時勢ですから空巢も出ますが、此処では人の住む場所は悪い気が溜まりやすいと言ってね。いやはや。でも、お兄さんも、アレでしょう」

男が何を含もうとしているのか解らずに、眉を顰めたまま一歩下がった。

「何のことです？」

「いえね。あの洋館部分が、良いにも悪いにも、どうにも色々誘い込むみたいですよ。まあ、聞き流してください。聞き流した方が良い。この谷は、どうにも空気が濁ってしまいましてね。四方から嫌な空気が入り込んでここに溜まるんですよ。だから住む者、皆、変な気にさせちまう。戯言です。ははは」

色黒の親父はからからと笑った。

第十二話

往来は強雨。隔離された気がして居心地が悪くなる。出来る限り早く、親父と離れたかった。身も漫ろになり、会話を打ち切ろうとする。

「あの。この饗庭さんって、今、出られていらっしゃるんですか？」

「いや、上ですよ。この上」

男がちらりと上目遣いで見上げるので、直継もつられて上を見る。

「二階で下宿しているんです。母屋の方に釜がありましてね。昔はその主人が弟子をとって古くから焼き物を伝えておったんですが、今は古い物はさっぱり人気がない。で、饗庭のような東京の美大とか出た若者に釜を使わせてるんです」

「その方、西井さんの孫なのでしょう？」

「ああ、ああ。いえ、孫じゃありません。もっと遠い。ま、どんなに血が濃くつてもね、地元を離れりゃ、他人も同然って言うじゃないですか。あそこで聞いたんでしょう。管理人の。あん爺さんは昔の話が大好物だね。まあ、ある事ない事。耳を貸してはいけませんぜ。この上の兄さんも一応西井の親類ですが、遠い遠い。お孫さんはとつくにあの家で亡くなられてね。遠縁がああな屋敷を継ぐやら継がないやら。あんなもの資産価値なんかありませんが、やはり貰えるもんは欲しいんですかねえ」

男は肩を竦める。直継は、その饗庭という男を弁護しなくなった。「でも、あの家、貸してないじゃないですか」

「あの家は余所もんには敷居を跨がせないですよ。貸す貸さないは本人の意志じゃねえ。家が決めるんです。彼は御両親亡くされたとかで不自由してるんでしょうか、よく私は知りませんがね。所詮は東京の人間。才能はあるつつても」

家が決めるとはどういう事か。先を聞きたい気もしたが、聞きたくない気もした。家に徘徊していた白い影は白蛇か何かなのだろうか？

「才能、ですか。確かに良い器ですね」

周りを見渡す振りをして話題を逸らす。

「ええ。あの男の作る器は皆同じ形なんです。寸分違いなく。気持ち悪いぐらいですね。嫌がる奴まで居るぐらいで。私はまあ好きですがね。天才というか鬼才ですよ。普通はいかない。上薬もほら」

先程まで貶していた饗庭という男を易々と褒める。どうにもこの親父、普通の人間のような思考回路じゃない。目鼻立ちも特殊だ。

「今は……今も上に？」

「ええ居ますよ。恐らく居るでしょう。店出たところが階段になってましてね。上が下宿なんです。昔ながらの鉄製の階段ですから、上下する度、音になるんですよ。カンカンカンってね。今朝から音がないから、今日はずっと家でしよう」

「はは」

直継は愛想笑いを浮かべた。可笑しかったわけではない。向かい合っているとか苛々させられるこの空気から逃れたかった。

「それでは、有難うございました。失礼して」

「いえいえ。またどうぞ。是非ね。私思うんですがね。貴方、恐らく気に入られますよ」

脈絡のない話振りに、眉を顰める。

「何にです？」

「彼、饗庭さんにですよ。良かったですね。私の勘ですがね。お兄さん、良い男だから。ははは」

そう言つと男は再び椅子に座りなおして、スポーツ新聞を手にとった。

雨は未だざあざあといちの如く降り続いてたが、西の空は明るい。後三十分もしたら止むだろう。直継は引戸を閉め、面の鉄階段をカンカンと鳴らして上った。なるほど、凄い音だ。どこからでも聞こ

える。これならば、監視も可能だ。直継は、店の男が耳を澄ませて聞いている様子を想像した。

あの男が妙だと思ったのは、容貌だ。眼と耳がやたら大きい。何やら見る人を不安にさせるのだ。直継に向って『アレ』と言ったのは、何のことか。此処に着いてから妙なことばかりだ。

二階に辿り着くと、小さなドアがありボタンがある。押すとピンポーンと音が響いた。雨は小降りになってきた。恐らくこの音も、下の親父が壁に耳を広げて聞いているだろう。

そんな事を考えていると、僅かばかり扉が開く。

「はい」

若い男の声。暗い家の中、ドアノブを握る白い手だけが、はつきりと視界に飛び込んできた。

第十三話

「私、洋館の鍵を貸してもらった時、此方を教えて戴いて」

「洋館？」

大きく扉が開けられた。暗がりには現れたのは、優しい面立ちの青年。女性的といった方が良い。柔らかな外見に反して、声は掠れちゃや低かった。

「貴方、随分ずぶ濡れですね。この雨の中、傘も持たずに？」

「ええ、まあ……」

眼を細めて、直継を見上げる。伏せ眼勝ちの瞳が絵画的だ。美大を出て来て数年になるという話から、実際の年齢は若くて二十代半ばだろう。しかしどうにも十代の青少年にしか見えない。

「今タオル出しますね。中へどうぞ。雨も入りますから」

華奢な白い手が、直継の背中を押した。

仄暗く、間口の狭い玄関。すぐ脇が台所となり四畳位の板間になっている。その向こうが座敷だ。

タオルを渡された後、ごしごしと頭を拭く直継を青年はしつとりと見詰めた。

「あの家はもう中へ？」

低い声音は、十七弦のように低く伸びやかに鳴り響く。青年は直継を部屋へと案内した。

「ええ、あ、はい」

直継は柄にもなくどぎまぎした。妙な艶のある男だ。変わり者の陶芸家だとか聞かされていた為、もっと骨太な男を想像していたので、どうにも勝手が解らない。この白い細い手で轆轤を回すのだろうか。想像がつかなかった。

「もう、だいぶ古びていたでしょう。もう母屋はもう何年になるやら。私なんかこれだけ近くに住んでいるのに、億劫がって何年も観にいかず、阿藤さんに任せっぱなしで。此方にもまだ不慣れで。も

う五年も経つんですけど」

雨は疎らになったようだ。西からの夕陽が部屋を赫く染める。

「貴方、どちらから？」

「東京です」

「懐かしい。以前は住んでいた筈なのに、田舎に住み始めるとめつきり足が遠のいて」

ちよつとの間、青年は直継に背を向けてじつと通り雨を見詰めていたようだった。いや、違う。その向こうの山を見詰めていたのかもしれない。丁度あの家がある方角だ。青年は、ゆっくりと振り返ると、莞爾と笑み「お構いもしないですみません」、そう座卓の前に座布団を置いて、直継に薦めた。

「此方には何か、お仕事で？」

「いいえ……」

心境を説明するわけにもいかず、言及されたくない一心で、おざなりに答えた。青年は何か考え込んでいる風だった。

「何かあの家の事をお聞きになりました？それで観にいらしたとか」「いえ、通りがかりに素敵な家だ、と思っただけで」

「お荷物は？身軽でいらっしゃる」

色々話したい話題もあったが、次次の質問で余談を許さない。しかしどうも野次馬根性で聞いているのではないと思えた。

「え、ああ、今夜のホテルに」

「そうですか」

男はそつと目を伏せた。貴族の血の所為だろうか、所作が美しい。「妙なことを御申しあげてすみません。でも……貴方、直ぐ此処をお立ちになった方が良いですよ。今日は八月十六日。盆の時期に來られて何のご予定もなく泊まりに來られるなんて、何か憑かれたのか、御精靈様にでも当てられたのでしょうか」

第十四話

出し抜けに、あまりに仰々しく青年がそんなことを言うので、呆気にとられて見詰めた。

「いきなり、何です？御盆と何か関係が？街に立ち入ると何か拙いことでも？」

青年は、自分の動揺に気付いたのか、さつと頬を染めた。

「突然にすみません。お恥ずかしい。吃驚なされましたよね。聞き流してください」

「聞き流せと言われましても、聞き流せる内容じゃありません。この土地には何か？」

青年は再び少し考え込むように、掌で頬を覆って思索している。

外はザワザワ煩くなつたかと思うと、しんとなり風がそよぐ。盆行事でも、何処かで行われているのだろうか。しかし、あの家の二階から見渡した限り、神社仏閣は何処にもなかった。

「……直ぐ帰った方が良いのは本当です。此の地は、四方山に囲まれてまして、気が淀んでおります。だからか、よく妙なモノが蔓延ります。ただ雨が降った後、空気が流れていますね。もう少しお話ししましょうか。」

「気、ですか」

「ええ。この地に暫く居りますとね、空気が変わるのが解るのです」

直継は、男が何か言うのを待った。

「私は、両親には事故で先立たれまして。一人残され気が滅入っていた頃、此処を相続したものですから、田舎暮でもと越してきたんです。どうぞ、お寛ぎなさってください。何か冷たいものでも」

行き届いたもてなしに、丁寧な言葉遣い。青年は板場に立って、飲み物を用意してくれた。

座卓の上に、冷たい緑茶。急に張り詰めていた気が緩んだ所為か、

青年の言葉が胸に染み渡る。

「九能谷は真個な人間が住む所ではありません。獣やら物の怪やら、形にならないものがちらほら。私もはじめは気付きませんでした。此処から見えますあの山、名高い零場だそうです。昔は、熊野の神社があつたとか。火事で焼けてしまつたらしくて、それからどうにも妙な気が多いという話です」

青年は窓から蒼く夜に染まりかけた山麓を指差す。

「ははは、ご冗談を」

先程見たものの所為か、声が掠れる。青年は言葉では否定せず、柔らかく首を横に振った。

「全部が悪いモノでは御座いけません。無害な狸や狐も居る。山河の物が人型になつただけのものも多い。それが今ある姿」

時計の音が響く。これは妖怪村に迷いこんだのだろうか。青年は平然としていた。恐怖も何も感じ取れない豪胆なものだ。そういう直継も不思議と恐怖は感じなかった。ただ恐怖を感じないことに、少なからず違和感を感じた。怪奇的な話は、そう好きではない。

あの洋館に誘われるように中に入ってから、どうにも感覚が麻痺しているようだ。

界限を蔓延る物の怪。それが本当だとすると、あの家に居たのもこの土地に関わる何かだろうか。古い家に居る座敷童か、白蛇か。

「あの家、私が伺つたあの家、日本家屋の部分は古いと仰いましたよね？」

「ええ」

「あの一带は御屋敷街だったそうです。あまりに庭が立派なので買い取って、西井の家の方が買って表側を増築したと聞きます。母屋は古いでしょう。九能谷を統括するお家だったらしいです。見晴らしの良い高台です」

「あの……付かぬ事をお伺いいたしますが」

「はい、なんででしょう」

「あそこには何かいるでしょう」

青年は一転して怯える表情。震える唇を動かす。しかし声は出ない。

「誰か、というか何かでしょうか」

「貴方」

震える唇を舐めながら、饗庭は呟いた。

「何をあそこで見ました？見えたのですか？」

「着物が掛かっていて……動く影が。具体的には何とも」

直継は途切れ途切れ口にする。口にした途端、恐怖が空中に放散される。

「見ましたか？」

「え？」

「彼女の顔を」

彼女というからには女なのだろうか？一瞬唾を飲むほど、蒼白な顔色。あの小さなモノの正体をこの青年は知っているのだろうか。

「いえ、ちらつと影を見ただけで……饗庭さん、あれは何なんです？彼女と仰いましたか」

細い青年の肩に手を掛けた。先程の寒気が蘇り、誰かの体温に触れていたかった。

「すみません。あれは、ヒトではないんです。見えない人が大抵ですから、私も隠しておけるものなら」

青年は泣くように呟いた。

「あれは人形です」

そのまま饗庭は暫く顔を上げず、コチコチと時計の音だけ、部屋に響いていた。室内の温度が下がったように思えた。雨はとうに止み、風が出てきたのかサラサラと簾を揺らす。空は西の端が赤く染まっただけで、残りはどっぶり濃紺色に浸る。

意思を持った人形が、家中を徘徊してと言っのだろうか。ぶるつと身震いする。

「見えない人には見えません。山の狸や狐どころではない、もっと恐ろしいものです。貸家にしようと思ったわけじゃないんです。貸

家の方が役所の手前良いからって、阿藤さんに。阿藤さんは何やらあの家に執着しておられるのです。あんな張り紙張って、人を誘い込んで。恐ろしさ半面、私も言いなりに。貴方もこの街に居て薄々気付いていますでしょう。気が溜まっっていて。全て、何もかも、妙なのです」

震える肩から、青年の恐怖が少しずつ伝わってくる。

第十五話

顔を上げようとしない青年を前に、直継は華奢な背をそつと擦った。青年は小声で「すみません」と呟く。

「何度も取り乱しまして。どうにも私、気持ちを押さえられずに」「差し支えなければお話ください。一人で抱えられるよりは」

直継の言葉に、青年は頭を微かに縦に振る。時計の針がコチコチと進む。空は暗く、部屋に暗黒が広がる。硝子のコップに手を翳す、彼の指先は白い。

「そうですね。こういう事は話した方が驗が良いかもしれません…」

…
そう言つて、青年はゆつくり口を開いた。

「遡れば、私がああの御屋敷を相続したのは、両親を亡くした時です。父方には然程大きな財産は無かったのですが、母方から広い土地を相続しました。駆け落ち同然で結婚した両親でしたので、生きていく頃に親戚付き合いもなく、私自身、そんな相続するものがあるとは知りませんでした。税理士の方に教えて頂いて初めて、母の実家がそんな旧家であると驚いたぐらいです。色々現金も要しましたし、相続税も到底手が出る額ではなく殆ど手放したのですが、あの家だけ、一目見た時から心が惹かれて」

青年は微笑む。酷く痛々しい気がした。

「税理士さんにお聞きしたところ、祖母の父は梶井という家老の家、母は千種といつて京の公家だったそうです。あの屋敷の奥方でした西井かさねさんは祖母の叔母にあたるようで、ただ奥方は本家、祖母は分家で縁が遠かったと言います。私自身、祖母と一度も会ったことはありません。それでも妙な縁で、梶井の家の、祖母の従姉妹にあたる女性が、西井のお孫さん西井清一氏に嫁いだそうです。どの方も、子供に恵まれず周りにまわって私の所に。短命の家系なのでしょう、調べて戴いたところ、結婚している者も少ないようです。」

私自身、その母の従姉妹にあたる方とも一度も会ったことはありません。何でも、初産で亡くなられたとかで」

そつと眼を伏せる。黒々と睫が覆いかぶさり悩ましい様相。

「何はともあれ、天涯孤独になった身、縁のある土地があるというのは嬉しいことでした。ここは田舎ですし、税理士の方には売却を勧められたのですが、下見に来たら売るのは惜しくなってしまうて一人で住むには大き過ぎる家だとは解っていたのですが、東京の下宿を引き払って、あの家の洋館の方の二階に、家具を運び込んだのです。住んだのは、一ヶ月、いえ、数週間だったでしょうか。気楽に田舎暮らしを決め込むつもりで。当初、日中は本当に快適でした。不意に誰かが通り過ぎる気配があったのですが、私、右目の眼球に傷があつて少し不自由なものですから、その所為だと思つておりました。生まれ付き白い影が映るんですよ。でも、長く住めば住むほど誰か一緒に生活しているような気がするのです。奥の座敷の方に殆ど立ち寄ることは無かつたんですが、座敷に入ると何か気配がある。生来、靈感なんぞある方じゃありませんが、幽霊か何かこの世のものではないに違いないと。しかし、居る居ると思ひながらそれから数週間、ずるずると住み続けてしまいました。昼間は家の外に出たいと思う。しかし夜には帰りたくなるのです。きっとこれは呪いなのでしょう。呪いというのは言いすぎかもしれませんが、この町の者は皆、あの家には何かあると知っています。賢い者は近づかない。それが良いものにしろ悪いものにしろ……」

すつと息を継いだ。

第十六話

「それでも正気は正気だったのです。彫刻用の小刀を絶えず持ち歩いていましたし、陽が暮れれば洋館部分に非難しました。夜の座敷は何にましても恐ろしくて。でも怖いままでは、拉致があかない。正体を暴こうと、ある時、床の間の長刀を持ち出して、書院に布団を敷きました。すると、襖の向こうで何か行ったり来たりする気配があるのです。それも大勢。人で無いものが、酒盛りでもしているのでしょうか。障子に映る僅かな赤い影は、魑魅魍魎のようで。慄然としました。しかし襲ってくる様子もなければ、此方の動向を伺う節もない。私の身体は恐怖で全く動きませんで、そのまま朝を見ました。夢かとも何度も思いましたが、あまりにも明瞭で。それ以来食欲もなくなりました。それから数日後、私は座敷の二階を見つけました。それまで二階があるなんて知りませんでした。座敷に殆ど足を踏み入れませんでしたし、あの箱階段は解り難いでしょう。考えてみれば武家屋敷に箱階段があるなんて可笑しいのです。可笑しいという事すら気がつきませんでした。丁度、手前が一枚扉になっっているから、閉めてしまうと、非常に解り難い。昔は隠し階段のような役割をしていたのかもしれませんが。人の気配は、二階に門付けか盗人かが雨を凌いで潜んでいるのかもしれない、と、私は僅かな希望を持ちました。幽霊など居るわけがない、そう自分に言い聞かせるつもりで。襖を僅かばかり開けて、隣を覗きました。すると其処には、私の腰ほどの女性の姿。小さな、小さな……ええ、人間では在りません。慄きながらも、眼を凝らせば、背格好は市松人形。でも、魔性の物でしょう、その眼は黒く落ち窪んで、陶器の肌はどこか爛れて人の肌の様。私は丁度、目が合った。人形は私に笑いかける。そういう風に表情を変えたんです。笑ったかどうかなど解りませんでした。しかしもう恐ろしくて、声も出ない。足も動かない。人形の眼は硝子のように、じっと吸い込むように私を見詰めていた

かと思うと、衝と腕を伸ばしました。胡粉の手が腕を掴む、私は恐ろしくてしょうがなくなり、最後の力を振り絞って、手にしていた小刀を振りました。その後は記憶がふつりと途切れてまして。気がつけば庭に居ました。二階から落とされたのか何なのか。抜けた腰を引き摺って庭から、出ました。阿藤さんに後でその話をすると、あの家を残した者の思いが強いから妙な幻覚を見たのだと、相手にしてくれません。しかし、私はもっと恐ろしいモノだと思うのです。それだけでない……」

再び言葉が途切れた。

直継は勇気付けるように、青年の膝の上の載せられた拳を握りしめる。掌は冷たかった。

「恐ろしいのは、その人形の顔が……まるで自分のようだったからで」

青年は縋るように、直継を見た。

「自分のよう、とは？」

「まるで鏡を見ているように、似ているんです。眼も鼻も耳も、自分の顔でした。それ以来、私は恐ろしくて恐ろしくて、あの家に近づけない。人形が怖いだけではない、自分の顔をした人形が何を暗示しているかが怖くて。ただ阿藤さんは言うのです。貸しなさいと囁くのです。何故か解りません。それも呪いなのかもしれません」

再び饗庭は沈黙した。

「こんな事、初対面の方に話す事ではないんです。それは解っているのですが、どうぞ、お聞き流してください。貴方不思議は空気を持っているのです」

「どうぞ甘えてください。私自身、話相手もないほど、俗世から離れてしまってます」

そういうと青年は少し笑った。憂い顔も美しいが、笑顔も撫子のように繊細で艶やかだ。美しいモノに情が湧く、それも人情というもの。

第十七話

「私は靈感など殆どありませんし、別に悪霊退散の呪術が出来るわけではありませんが、こういった事は一人より二人の方が心強いものと思います。貴方さえ差し支えなければ、此処を出ましよう」

直継は青年を助ける気で、力強く膝に手を置く。

「ええ……」

青年は齒切れ悪く答える。

「私も当初から、こんな怖かったわけではありません……靈感などなかった。何時ぞや、呪いなど妙なモノを意識するような心持になりました」

青年は此処から離れようと強く言うのに、全くその足は動かない。直継は眼の端に外の窓を捉える。陽は落ちた。群青の空、高いところに棚引く雲。饗庭は直継の手を握った。か弱い力に、圧倒される。「あの、もう少し聞いて貰えますか。此処に越してくる直前、母がなくなった時、菩提を弔うために京都まで行った時、母方の親族と会食をしました」

饗庭は卓上のコップを見詰めながら、徐に話しを続ける。

「初めて親戚と対面することになった私は、若い事もありまして、感動の再会のようなものを夢見ていました。しかし、現実とはそう甘くないもので。祖母の代の本家の方、大分年配の方が、第一声こう云われました。女子があんな早く死におつて、男を長生きさせた罰があたったんじゃない、と。その時は、母の死穢す親類に腹を立てて、その言葉の意味について深く考えませんでした。でも、京都から帰ってから何かどうにも気になって。調べますと千種の家では長子が家を潰すと云われ、女の子が望まれていたようです。家が零落れる過程でそんな迷信が生まれたのでしょうか。魔に憑かれると申しましようか、長子に男の子が生まれても大抵育たない。本家の長子は養子に出して、分家から次男を貰うということを、つい最近までして

いたそうです。私も幼い頃病気がちで、二十歳まで育てば良いと言われたそう。迷信と言ってしまえば迷信です。私は生きているのですから。でも、どうでしょう。私の身は、何年経っても変わらない。外見はちつとも男らしくならない。迷信というか、呪われているのではないか、何時の頃か、そう感じるようになりました。九能谷に来る直前の事……最近どうにも、この土地の空気を吸っている……自分も人間でないような気がして」

「気の所為でしょう。お若いからそんな事を考えるのです。人間三十過ぎれば、若く見える外見を誇らしく思ったりするんですよ」

「いいえ、私は若くはありません。貴方より、そうですね五つは上でしょう」

「まさか」

唐突に頭を擡げ、直継に縋りつくように声を上げる。

「お逃げください。この土地から、貴方、なんと仰いましたか」

「北山ですが」

突然声の調子が変わった饗庭に、少し後ずさる。

「北山さん、さあ、早く。夜も更けないうちに。宵には色々なもの本性が出ると言われます。九能谷が零場として噂されたのは、熊野も焼けた頃。短く云ってしまえば、四五百年以上前なんです。以来自殺者の骨がごろごろと出土する。戦争の時分もそうでした。此処の裏山に自殺者が増えて。何故か家だけ空襲を免れ綺麗。その殆どは物の怪が住み着いて。つまりは化け物村なんです。貴方のような方がいる所じゃない。夜になると気が立ち込める。皆元の姿に戻る。そうなると駄目です。貴方も数日住めば此処から出られない。お逃げ下さい。然程性質の悪いモノは居ませんが、猫又などは腹が減っていれば、旅の者を攫って食ってしまうと云う話」

青年は急に堰かす。阿藤という最初に鍵を貸してくれた老人も、階下の男も、饗庭青年の話信じれば、物の怪という事になる。御簾が音を立てる。風が出てきた証拠だ。辺りから線香の匂いが立ちこめてくる。

「それを言うなら貴方もでしょう。此処から出ましょう」
そう言つと、首を横に振つて眼を伏せた。

「私はもう駄目です。五年も此処で暮してきましたから。足がどうにも此処に戻つてしまふんです。昼間用を足しに他の町に行つても夕餉の時刻になると九能谷が恋しくて恋しくて、知らぬ間に戻つてしまふ。これがこの地に住んだ者の運命です。実際、もう人間でないのかもしれない」

寂しそくに言う若者が、気の毒になる。喩えヒトでなかったとしても、このまま置いておくのは酷だろう。絵になるような青年だから余計そう思えた。

「ならば、なおさらな事、一緒に此処を出しましょう。これも他生の縁、見過ごすわけにはいきません」

この際、化け物でも何でも構わない。直継は、饗庭の手首を取つた。

「ビジネスホテルはすぐ其処です。荷物を取つてきます。まだ電車はあるのでしょうか？」

青年は頷く。

「私と一緒に此処を離れましょう。貴方、恐らくこの地と縁が遠いから馴染めないんです。私も前の人生を切り離したくてこの土地に着きました。恐らくこの土地で会つたのは何かの縁」

青年は再び何かを考えるようにじつと見上げた。

「貴方、不思議ですね。何か恐ろしげな」

恐ろしげとはどのような意味だろう。暗に拒まれているのだろうか。

「何がですか？」

「いえ……。貴方と何処かで会つた気がして……」

「早く行きましょう。宵になると拙いのでしょうか？」

「ええ、そうなんですが……」

青年の足は畳みに根を生やしたように動かない。直継は次第に苛苛してきた。こんなことではあまり感情を擡げる方ではなかった筈

なのだが。

第十八話

苛苛するのは執着心の所為。では、何故、執着しているのか。何
が原因で執着するのか。

目の前の青年を見遣る。力無く畳みに座る姿は、意志薄弱、まるで人形のようなのだ。

老いも無く死も無く——乃至無老死 亦無老死尽。

現世にある万物全て幻。善も悪もない。苦もなく、滅もなく、道もなく、智もなく、得もない。

妖魔に憑かれたかもしれない青年を見て、仏の教えを思い出すことなど、ナンセンスなのだが、青年の何も映っていないような無垢な瞳を見ていると、たとえ妖魔であろうと、人間であろうとなかろうと、連れて帰らなければならぬ気分させられる。

「安爾、曼爾、摩禰、摩摩禰、旨隸、遮梨第……」

小さく陀羅尼を呟くと、男は今起きたような、はつとした顔をし、直継を見上げた。

「何か。今何か」

「経文です。小さい頃、魔除けとして教わりませんでしたか。足、動きますね？」

青年がふらふらと立ち上がった時、外から何かを転がすような音が聞こえてきた。

「しっ」

どちらとも無く息を潜めた。

カラコロ、カラコロ……

たった今動いたその足で、饗庭は、慌てて簾を掻き揚げて通りを見下ろす。裏路地に反響する、下駄を引き摺る音。

「今晚和。お珍しい。お散歩ですか？」

饗庭は、路地を行くだろう人に声を掛けた。直継には見えない。知人だろうか。

「御精霊様が其処彼処歩いていられますから、わしもついでに」

返答は年寄の声。それが鍵を借りた老人の声だと気付くのに、然程からなかった。

「ええ。雨も降って涼しくなってますから気持ち良い頃でしょう」

「そうそう。君ン所へも行くこうと思つてね。饗庭さん、今日お客さんが来たでしょう。お一人」

一瞬間が空く。

「ええ。先程」

「彼は、帰つたのかい」

「もう帰られました。何か」

饗庭はさりと恍ける。

「いえね。まだ鍵を預かってないんです。氣になつてしまつて。どうにも年を取るとねえ」

そうだ、まだ返しに行つていない。直継は、慌ててズボンのポケットを押さえた。それに気付いたのか、饗庭は下の老人に気付かないように視線を送り、「私が、預かっておりますが」と莞爾と笑んだ。

「そうかいそうかい。良かった良かった。彼はどうだったかね？」

「貸す気には、到底」

傍で聞いていて、漸く当初は家を借りに来たのだと思ひ出す。

「そりゃあ残念」

阿藤の声は嬉々としているように、まるで、当然、とでもいうように、直継の耳に響いた。

「妙な氣の旦那でしたね。此方に來られてから向こうに行かれたんかね。何か言つてたかね」

「私には何とも」

「奥には入られなかつたんですかね。その辺に骸をうつちやつてるんかね」

「……私には何とも」

再び下からの声が止む。会話が止むと蟲の音が煩くなる。今の台詞が何を意味するのか解らなかった。耳を澄ませる。

「まあ、御盆だからね。ざわざわ落ち着かない。西井の家もね。何だか近くまで見に行ったら、なんか空っぽな感じが寂しくてねえ。

鍵は明日貰うよ」

「はい。散策、お気をつけて」

カラコロ……音は徐々に遠ざかっていく。饗庭は、窓から身体を離れた。

「参りましょう。暗夜の小道を散策するのは狸か狐か。化かされないようにしないと。駅には辿りつけません。何にしても今日は気が乱れていますから。何だか呆けてしまつてすみませんでした。ホテルから駅まで、路地を御案内します」

老人が完全に行ってしまったのを確認してから、二人は大きな音のする鉄階段を降りて、表通りのホテルを目指した。

第十九話

緩やかな坂道は永遠に続くかのようだった。足元を照らす送り火が風に揺らぐ。

「先程の、何ですか？」

「何って？」

「だって、貴方、何かされて」

「ああ、御経の事。妙法蓮華経。覚えていらっしゃる方は少ないでしょうが。耳になさった事はあるでしょう」

「北山さんって、御職業」

聞きたくなかった。饗庭は、直継の突き刺す視線に、続く言葉を飲み込む。直継は溜息を吐き、突き放すように答えた。

「実の所、何もしていませんのです。親の資産を食い潰す如く、国家試験に何年も受からなくてね。物を書いて薄給を得ていた時もありますので、物書きと云ってはおりますが。御経は、家の裏が寺のようで、幼い頃耳齧っただけです。信心は全く」

「……」

饗庭は何か言いたげだったが、直継はちらりともせず足を速めた。自分の人生など、因もなく果もなく、浮世の辛いままならないことばかり。決して楽しいものではない。

空は晴れ渡り、星が降り注ぐ如く瞬いていた。軒下に焙烙の小さな明かりが点々と連なる。直継は懐かしい気分になった。どこかで見た情景。焙烙の隣には、供え物が置いてある。直継は話題を変える。

「施餓鬼会ですかね」

「ええ。此処ではお供えは必ず無くなります。さっきの阿藤さんもお供えを食べに行かれたのでしょうか。勿論、餓鬼も食べますし」

饗庭は声に出して笑う。冗談か、冗談のつもりではないのか。餓鬼が出るにしろ、地元の老人が食べるにしろ、どちらにしろあまり

気持ちの良い光景ではない。極力考えないように努めた。

ほうほうと梟が鳴く。生暖かい風。道に並ぶ送り火。確かに面前に広がる光景はどれも懐かしくなるものだと思った。眼前に広がる光景に再び陶醉していると、饗庭がぐいと袖を掴む。

「お気をつけて。一旦彷徨えば容易く元の道には戻れません。脇道は過去へ、未来へ、夢へと誘います」

「はは」

芝居口調なので噴出すと、青年はやんわりと制した。

「本当です。九十九神信仰というわけではありませんが、物には神格があるという。九能谷に居れば、戯言でないと気付きます。お足元お気をつけて。道に攫われぬよう」

饗庭は振り返り、振り返り、そう囁いた。白いシャツが夜風に翻る。火照ったような頬は薄紅を差したよう。漆黒の髪、白粉でも塗ったような項、細い頤、なだらかな肩の線、唇は薄紅、薫香、伏せ目がちの瞼には、送り火がちらちら。

女でもこんな美人は珍しい。直継は陶酔と眺めた。

先程の話では青年の祖母の千種家は、因襲の残る家だという。女より美しい男の子が生まれ育った事に、祖先が嫉妬し、呪いでもかけたのかもしれない。

路地の上からは大きな月が顔を覗かせていた。

「ご覧下さい。ほら、満月」

「綺麗なものですね」

まるで童子のように月を見て嬉しげに笑うその様子、辺りに花でも咲いたように見えた。

「満月が好きなんです。月が欠けたのは恐ろしくて気が滅入ります。器も欠けているのが嫌いなんです。左右上下対象でないとどうにも欠けたモノが嫌いつて珍しい性分でしょう」

饗庭は心持、陽気になったようだ。四辺一面、騒がしい蟲の声。夕立でたわわな露草に揺られているのだろう。ホテルまでは後五間

程。瑞々しい空気が行く先を満たす。

「昔から整然としたものが好きでしてね。轆轤を回している時も、ゆがみのない円を作ろうとしてしまいます。それが講じて魔除けのようになっているのは面白いことですが」

「魔除け？」

「完全な形はどうにも嫌いな輩が多いようで。私が正気を保つてきたのもその為なのかと最近思います。芸は身を助けると申しましようか。あの、きつと、貴方の力もそうです。貴方の御経を聞いた時、私、ほつと心が温かくなりました。きつと生前の功德でしょう」

「そんな良いものではありませんよ」

「そうでしょうか」

道の端にホテルが見えてきた。蛍光灯の光に虫か埃かが集り、昭和初期に立てられた事を彷彿させる概観。

直継は戸口に青年を立たせ、ホテルの中に足を踏み入れた。

「此処で待つていてください。すぐ荷物を取ってきますので」

「ええ」

「この場に居てくださいね、逃げないでくださいね」と思わず妙な事を念を押しそうになる。別に数分離れるだけの事。ただ何か、良くないことが起こりそうな気がしてならなかった。

第二十話

薄暗いホテルのフロントには、ポツンと顔の大きな男が座っていた。こんな受付だったのだろうか。記憶が曖昧だ。

直継は近寄って用件を云う。

「今晚予約していた北山ですが、キャンセルに」

男は目を細めた。誰か、いや、何かに似ている。

「どうなさいました？」

「仕事を忘れてきてしまつてね。急遽、帰らないとならなくなりまして」

適当な話をでっち上げる。

「東京にとんぼ返りですか。それはそれはお気の毒。まだ電車もありますから」

「ええ」

「へへへ」と、男は耳につく笑いを残す。

「お盆ですからね。くれぐれも電車に乗り間違えて、あん世に行つてしまわれないように」

「はは」

冗談に対する突っ込みをしようとしたが、声が出ない。乾いた笑いだけ残った。

「お盆といつても人手が少ないですね」

苦し紛れに世間話に持つていこうとする。

「そうですね」

「誰も通りに出られていない」

「此処ら辺はね、昔はよく死人が出たんですよ。それから妙な噂が立つてね。お盆に外に出ると、御精霊様に嫉妬されて冥土まで連れていかれちまいますってね。施餓鬼も同時にやるんですがね、ここあたりは、昔『くがや』って呼ばれるくらい土地が痩せてて、餓鬼が多く出るっていうんで。お供え物を沢山して、皆、で歩かないン

です。出歩く奴は目出度え奴か、後ろめたい奴だ。それか……」

男は次の言葉を発しようとしないう。辛抱切らして、質問する。

「くがやとは何です。皆、そう発音されますよね」

「そうです。『苦しみ飢える谷』ってね、『苦飢谷』。明治ン時、『九能谷』と当てられたようで、でも古くからの者は『くがや』って呼びます。天災が起こると忽ち、此処は周りから隔離されてるでしょう、そりやもう、死体だらけだったという噂です。誰が熊野を焼いたんだか。その頃は、祭るところもなくて、裏の山に持って行った」

「だからあそこ山が零場に？」

「いや、それはもつと古い頃からですが、ね」

そう云いながら屈んで荷物を取り出す。男は不意に、じろりと舐めるように直継を見詰める。頭の天辺から、足先まで。

「お客さん、身体中撫子の匂いがしますね」

眼を細めながら、くんくんと、今度は匂いを嗅いだ。猫背で手足の短い男だ。年齢は不詳、恐らく五十代後半。ぎよろりとした大きな目が印象的。直感として、人間であるか疑わしい。しかし乗り掛かった船、一々驚いてもいられない。

「この香。恐ろしい匂い。あン場所から生還なさったってえわけですね。私が嗅ぎ分けられねえもんですかい。ああ、でもアレ等はこんな匂いはしなかった。気に入られましたかね。それとも逆ですかい」

急に言葉が碎けた。珍しいものでも見るような目付きで直継を観察する。嫌な笑いが耳に残る。

「アレとは何の事です？」

確か、ギャラリーの男も言っていた。振り払うように腕を動かす。目の前の男は、見る見るうちに、獣へと変化した。前持って聞いているが、突然の物の怪に疎んだのも事実、思うように身体が動かない。

「えっへっへ。知らんですか。教えて差しあげましょう。アレと

はね、ほら、アレだ。あそこ巢食う魔物の匂いに釣られて来る珍客の事ですよ。そんなアレを、逗留客を、皆で燻しあげる。怖い怖い。あんな奴等に、手を貸しては駄目ですよねえ。皆、食われちまう。あの食い意地の這った奴に。客じゃねえ、足のある御馳走だつて笑つてますよ。魔物だつて食われちまうのに、人間たあ、煩惱が多すぎて駄目だ」

ぎよろりとした眼を細めながら、荷物を上に置く。

「あの若造の匂いもしますね。あの男。花の香がしますでしょう。死臭を隠すために香を焚いているのです。女の化け物と、魂を分かちおった人形ですよ。あの男にはお気をつけください。普通の人間の振りしてますよ。狐も狸も梟も化かされる。えっへっへ。そりや見事。でもよく考えてごらんなさい。人間の訳がない。へへっ」

男は嬉しそうに笑う。要領を得ない喋りは正しい判断を置き去りにする。

「化かされるとは？何の事です？人間でないって？」

若造とは饗庭のことだ。

第二十一話

「へへへ、何と言われましても。化かすっちゃあ化かすんです。化かされる奴が悪いんです。ええ、どう説明致しましょうね。旦那、一寸も煩惱がないから、上手い具合に捕まらなかつたかね。煩惱の多い奴等は駄目です。直ぐ餓鬼になる。あん男は、あの容姿でしよう？老若男女、次から次へと自分の手の内に誘いこんで駄目にしまう。流石、西井ンとこに嫁いできた化け物の血。正気じゃねえ。物の怪どもも二者択一怖い怖いと。阿藤の爺は別です」

饒舌な化け物風情を前に、直継は平常の感覚を忘れ、片頬を頻りに撫でた。

「お、怖がらせちゃいました？あの家に連れていくんです。引き込むんです。あの家行かれたんでしょ？怖かった、怖かった。あそこは魔の付く家。捨て置けば狐狸が住むどころじゃあない。華族だか子爵だかなんだか呪われた血を貰った所為ですよ。西井の旦那が、妙なもの作つたのもその因果」

眼を細めて、化け物は喉をごろごろ言わす。瞳の色はコロコロと変わった。まるで猫の瞳。それが、目の前の直継の怯える様子を楽しむ。

「妙な物つて、あの洋館？」

震える声を絞って尋ねると、男は大きい頭を振る。直継は、台の上に載せられた鞆の取っ手を握り絞めた。すぐ様、この場から立ち去れるように。

「ええ、ええ。そうです。アレは怖い、怖い。元は綺麗なそりや綺麗な奥方だった。皆涎垂らして藪の影から見たもんです。でも西井ン旦那は畜生にも劣る気質。あの奥さん大切にしないでじゃない、生前贅沢三昧、餓鬼道にでも落ちたでしょうよ。でもそれから、あん嫁さんは妙な事に嵌り始めた。あん家にはね、積み重ねられた呪いがあるんです。そして奥さんの血は呪われた血。私は好きじゃね

え。でも、物の怪にはそれが好物な奴もいる。阿藤の爺さんとかね。あれは九十九の神だとか熱を入れて、恐ろしげもなく出入りする。でも、あれこそ死神ですよ、裏鬼門に這い蹲って、白い影がヒューヒュー、死霊食ってドンドン大きくなる。あん若者は、その人の分身。心を分かつてるんです。あれは駄目です。見目は綺麗ですがねえ。九能谷には合わない。西井の嫁ン気を貰うくらい心が弱いんですって。人間だったら、当に毒気に当てられて死んちまいますよ」

饒舌だが、内容は明瞭ではない。

「どういう意味です？ 駄目、とは」

直継が乗り出して聞くと、男は眼を見開いた。黄金に光るその眼に一瞬慄く。

「いえね。あはは。お兄さんお人が悪い。えっへっへ。何を喋らせるんですか。あいつは鼻に見張られているから、殆ど出てこない」

男は口を横に開けて、しりと笑った。

「鼻とは、まさか下の、下に居た」

「そうです。そう。あいつ、丸いもんが好きでさ。嫌な奴。ともあれ、あいつは鼻怖くて出てこれない。だって西井ンおっかない嫁の魂、貰ってるんだから」

直継は既に誰の言うことを信じていいのか、解らなくなっていた。画廊の男が鼻だと目の前の化け物は云う。しかし彼は人間だった。饗庭の事も人間でないかの如く云う。何を信じればいいのか。

ちらりと背後を見る。出口には静寂と佇む、饗庭の姿。硝子越しのその姿は闇に溶けなんとする陽炎のよう。硝子一枚向こうは夢幻の世界。黒髪に掛かる月影が緑を成し襟元にかかる。中空を仰ぎながら、白い二の腕を摩る。

うつとりとなる芳しい清らかなその様子に、どうにも魔物と重ならなかった。

それに純真な魂だ。目の前の男こそ、まさに物の怪だろう。

「魂を貰って生きているとは、どういう意味です？」

「えっへへ。失言でしたね。すみませんね。そんなあの男の匂いを

匂わせておいて、お知りでしょう。私、西井ンのおっかないのに崇られます」

此方が引くと前に出て、前に出ると後ろに下がる。上手い具合にはぐらかす目の前の男に、恐怖より怒りが立ち昇ってくる。

「獣風情が」

思わずぼろりと口を継ぐ。男は、目を細めて再び大きく嬉しそうに開けた。

「貴方、相当、強い気の持ち主だね。煩惱は何処に捨ててきたんですかい？ここに馴染みそうにないねえ」

「話を続けてくれ」

「えっへっへ。今日はお盆。言葉は言霊となつて、あのおっかないのが寄ってくる。此処等には、あの阿藤の狸も梟もその他、魔に染まったモノが沢山。昔は平和だったんですよ。それでも、熊野が焼かれ、西井が変な家を建ててから、此処はどんどん穢れていく。皆して逗留客を独占して食ってしまう。元凶はあの魔物。あんなに鬼道が開かれて、あの家は死人臭い」

「鬼道？」

「へへへっ。鬼道ですよ。あの屋敷は鬼門なのに、六道の辻なぞ造りおった。だから鬼が通る。魔が通る。死霊が通る。あそこの家は恐ろしいものの通り道。私等山の物の怪だって寄りつかねえ。恐ろしい」

直継は、洋館と日本家屋の間にあつた妙な部屋を思い出した。六辻は死者の通りというのを聞いたことがある。

「でも魔物ら、あれより先には出られねえんです。八角形の妙、所謂、結界だね。へへへ。旦那、腹は減りませんか？」

目の前の男はむくむくと大きくなり、口が両側に裂けた。髭は直継に覆い被さる。尋常でない。直継は、はっと一歩下がる。

「腹が減りませんか？私はそろそろ腹が減りましたよ。夕餉の間だ。腹減った、腹減った」

毛の生えた獣の手が直継に伸びる。直継は思わずそれを振り払っ

た。貌は大きく大きく膨張し、嬉々として直継を見下ろす。狸や狐
どころじゃない。これは立派な化け物だ。

目の前に広がるは、獣の口蓋、黒くぱっくりと開いた暗闇。
思わず飛びのいた。

第二十二話

フロントから化け物は這い出て、直継の上に圧し掛かる。両側に裂けた唇に研ぎ澄まされた牙は、純粹に肉を剥ぐ事を切望する。

「逃げるとは酷いでねえかね。ねえ旦那。私は少しお喋りし過ぎました。旦那はとっても助かった。助かった序に、ちよつと駄賃が欲しいんでさあ」

咄嗟の事で何も思い浮かばなかった。後ろ向きに足を進めようと
して、冷たい床の上にひっくり返る。

神仏、この際何者でも構わない。助けたまえ、そう心願して眼を瞑る。心を静かにすれば、浮かんで消えるは、裏の寺の坊主の顔と陀羅尼本。

「…爾、曼爾、摩禰、摩摩禰……」

同じ箇所を呪文のように続ける。記憶の端から浮かび上がる経文、真個の火事場の馬鹿力。

「無垢清浄光、慧日破諸闇……」

すると目の前の黒々と毛に包まれた化け物は、「ひひひ」と喉から妙な音を出した。

直継が眼を開けると、覆い被さんとしていた化け物、数歩後ろに下がった。

「旦那は運が良いね。何か嫌なモンが来るね」

そして、くると背を向ける。

「荷物渡した。旦那はもう帰る。駄賃はもう良い。気の強い方だ。

殺生は興味ねえ、興味ねえ」

へへと気味の悪い笑いを残して、キィと裏口に姿を消した。あつという間の退却。何が来るというのだろう。決して良いものではない。

扉の先には、霞とも紫煙ともつかぬものが立ち込める。青白い月明りが四辺に静かに押し寄せる。

耳を澄ますと、遠くから鈴の音、人の足跡、小道具の音。地面が沸いたような静かな地響き。

直継は、荷物を肩にかけ、迷わず表を目指した。

硝子を開けると、表通りも霧にのまれていた。見渡す限り朧な世界。

息を堰いてホテルから出てきた直継に、ゆつくりと饗庭は振り向く。

「どうされました？」

「急ぎましょう。あの化け物、駄賃が欲しいと。血肉の事でしょう」「ここの従業員ですか？それは、まさか」

早口にまくしたてる直継に、饗庭は、緩慢に眼を見開く。

「何かが来ると云っていました。この濃霧も尋常じゃない。ここから駅は直ぐの筈です」

「申し訳ありません、あの方がそんなものだとは知らず、一人にさせてしまつて……」

「とりあえず、今は駅に」

掌を掴むと冷たくしつとりと濡れている。空色の羅に月影が絡む。その下には鮮やかに白く透ける雪肌。あまりに平常で美しく、気高く、眦に朱が入り頼りなく、悲しい笑顔。饗庭の顔を見詰めれば、今起こった事を全て忘れさりそうになる。

喩え魔物だとしても、不幸な魔物だ。それを守らずして何を守れというのだろう。騙されるのもそれもまた運命。傷があるという青年の瞳は何も映していないかの如く、黒々と濡れて融けだすかの様。「霧が濃くなってきましたね」

一間先は白く霞んでいる。誰かが人為に霧でも作っているような怪しさ。先程まで、遠くで鳴っていた音は消えうせた。

「道が濡れています。足元お気をつけて」

「ええ」

蒼き霞の天幕が落とされた。音一つしない。まるで世界から取り残されたような。

第二十三話

数間先は霧に消えているにも関わらず、何処までも長く続くような気がした。そして道案内自体、人間かどうか不確か。

「先程、ずっと貴方の事を考えていました」

「私の？」

「ええ。貴方が誰なのか、何故出会ったのか、会った事があるとするならば、何処で会った事があるのか……」

饗庭は返答を待たずに先を続ける。

「何だか貴方に会ってから、懐かしいというか、寂しいというか、妙な心地がします。寧ろ自分の心が空っぽにさせられるような、それでいて心の温まるような」

そう云いながら饗庭は空を見上げた。満月が見える。上の方が霧が薄いのか、妙な心地だ。

「その理由が何なのか、解らないのです。貴方を覚えていないのです。前世の記憶のように儚く、今見える月に掛かる雲のように、淡く、その存在を確かめようとすると消えてしまう泡沫のようでじれったくって。この感覚は何だろう、と考えていました。前世、近い縁があつたのではないかと。だから懐かしいような、甘えたいような、亡き親に会ったような心地がするのです。すみません、こんな事」

「構いませんよ」

青年の声は、凜と響く。幽玄なる道標の如し。二人を導く、送り火の赤い点々が風もないのに揺らいでいる。この道の先に続くは、駅か冥界か。自分の手に乗っかる美しい者は、人間か魔物か。まるで夢心地で足を繰る。

「会ってから妙な事を口走ってはかりで、気を害されたらと思うのですが、それでも何か話さずにはいられないというか。憧憬と云う心持は、こういうものなのかもしれません。まるで自分の存在すら

泡沫に消えてしまいそうな。私、貴方が私の家を訪れた時から、あの瞬間がいつか来るのではないかと予感していました。不思議なのですが、自然にそれが訪れたというか。それは良いとも悪いともつかない予感なのです。本来、誰か客が来ると、私、茫然と自分を見失ってしまっているようで、記憶が残っていないのです。以前も、阿藤さんに人を紹介して貰った筈ですが、全く覚えていません。余所の人の記憶を消してしまうのでしょうか。けれども貴方と数刻一緒にいただけで不思議、心が静かに落ち着いてくるのです。だから私の気が確かにあるうちに、此処を出て欲しくて」

「記憶が無くなるのですか？」

「ええ。不思議と。誰に会ったのかさえ覚えていないのです。ああやっていつも阿藤さんが鍵を取りに来るのですが、自分が誰にあって鍵を渡されたのか覚えていない」

ポケットに入っている固い物を思い出す。

「ああそうだ。忘れるところでした。鍵、持ったままで」

「それは貴方がお持ち下さい」

饗庭がやんわりと制す。

「いや、私が持っていても」

「貴方が持っていた方が良い気がします。お願い致します」

「はあ」

実の所、あんな気味の悪い家の鍵など、長く持っていたくなかった。

しかし、青年の複雑な顔を見ると、返すに返せずに、再び後ろのポケットに仕舞う。饗庭はそれをじっと見詰めていた。

「貴方に感じる、この心地、何て申し上げたら良いのか。今もそうです。夜に外出しようなど、今まで思ったことはなかったのです。この街が恐ろしくて。でも、こうして一緒にいると、心が澄みわたるような気がします。けれど、なんて申し上げたらいいのか、同時にそれが不安で仕方ないのです。先程、貴方の事怖い方だと申し上げたのですが、実際、恐怖とは違う、何か空恐ろしいようなそんな

気にさせられるのです。ふと気を抜くと私の気持ちは何処かへ飛んでいってしまいそうな、魂が攫っていかれそうな、私の足は地についているかとか、掌は透けていないかとか、柳の枝のように足は揺らいでいないかとか」

「可笑しな事を仰られるのですね。大丈夫ですよ。そんな事心配されなくても」

突拍子も無い事を云うものだ。直継が笑うと、饗庭も、瞳を細めた。

「きつと、憧憬も慕情も不安も恐怖も全て、根を辿れば同じ感情から出てきているのでしょう。初めて会った時から、貴方の背格好が誰かを髣髴させるのです。その話し方や声が私を揺さぶる。所詮、人はそのような因果の網の中で生きているのでしょう。本当の事を申しますとね、私、貴方に帰れと云っておきながら、貴方を返したくないのです。此処に幽閉しておきたい。男の方に、こんな事を申し上げるのは、妙なのです。でも、この霧はまるで、自分の気持ちのような気がします。私はこの地を離れませんから、何時までも此処に貴方を閉じ込めておきたい、そんな気にさせられます。でもそんな事、不可能ですね。道理に反しますね。こんな、混沌した心地を申し上げても、お困りになるだけです。貴方がどのような想いでこの地に踏み入られたのかは、存じ上げませんが」

「貴方も一緒に、私と来るんですよ。此処を離れるのです。申し上げたじゃありませんか。だからこうして駅に」

そう云うと、呆けたように、直継を見上げる。そして眼を伏せる。睫の影が頬に掛かる。

「それは無理です。どうして、そんな事……」

そこで言葉が一瞬、途絶える。しかし、次の瞬間、男は顔を上げ、「貴方と約束申し上げても宜しいですか」と囁く。

「約束、ですか？」

脈絡のない行動、錯綜した会話、気でも触れたのかと案じたが、そうではなさそうだ。

第二十四話

「ええ」

饗庭は、ふつくりとした臉を落としてまどろんだように答える。

「約束というと幼い気もしますが。昔、誰かとうとうして約束を結んだ気がします。心許無い単なる言葉に過ぎないのに、どうして人は約束を結ぶのでしょうか。それでも形のない何かに縋りたいと思うのか」

その言葉は夢現だった。

「でもそうだった儚い物だからこそ、一層欲しくなるんです。北山さん。私の事を心に留めておいてくださいますか？」

「心に留める、とは。それが約束、ですか」

首を縦に振る。

「それは、貴方の事を忘れないという事ですか？」

「いいえ。そんな、『忘れない』なんて、大それた事ではありません。漠然と心に留めておいて欲しいだけです。尤も、顔貌とか名前とか生い立ちとか、そんな事は忘れてくださって構わないのです。

でも。私、人でこの街で生きているとふと、心細くなるのです。誰か、遠くの街で私の事を心に留めておく人が居る、それだけで心が救われる気がしてならない。まして貴方は、他人の気がしませんので……。何時の日か、不意に思い出して懐かしがって戴きたいのです。美しい景色を思い出すように、漠然と、この今此処にある感情を、そして今此処で触れ合った魂が何処が存在するかもしれないということ、留めておいて欲しいのです。約束してくださいますか？」

魂とは。本当にとりとめのない事を云う。真剣な表情に、面食らったが、直継は笑顔で諾した。

「解りました。今際にも必ず思い出してみせましょう」

口ではそう云ったものの、あまりに漠然としすぎて、死ぬまで背

負うには重過ぎる気もして、直継は暫く言葉数が少なく、沈黙の中
並んで歩いていた。

いつまでも、踏み切りの音がしないのは妙だ。

「それにしても遠いですね」

「遠い？何がです？」

再び、饗庭は呆けたように、直継を見上げた。

「駅ですよ」

「ああ」

不意に、ホテルで聞いたざわざわとした人の気配。

「お祭りか何かですか？」

しかし人気はない。再び恐怖が蘇る。

「いえ……いえ、行き過ぎるのを待ちましょう」

青年は路地に入り、その場に座った。夜風が流れる。路地に入っ
た気がするだけかもしれない。それほど霧は濃かった。

それにしてもホテルは駅前にあった筈だ。先程から、三十分は歩
いている。幾ら何でも遠すぎる。さらさらと耳を擦るは、小川の音。
道を誤ったか。

霧の中、宙を舞う炎。風に揺らいでいるのではなく、動き回って
いる。

「小川、ですか？」

「川というか水路があります、でも、それは裏通りで」

「灯籠でも流す風習が？」

「いえ。でも、まさか。蛭と違いますか」

いや、蛭にしては数が多すぎる、其処此処に何百と浮かんでしる。
その時、霧が晴れた。辺りの町家がはっきりと姿を表す。どの家も
暗い。青味差す月の光、玄関先の小さな鉢植えには濃紺の向日葵。
一本先の通りの向こうから何か大勢の気配。

「何か聞こえませんか？」

「此方へ」

饗庭が服の袖を掴み、ぐいぐいと引っ張る。水の流れる音がはっ

きりと聞こえてくる。

風が出て水面は混ざり、大地が揺らぐ。忽ち月は雲に隠れた。騒音は遠くへ、赤々と水面を照らしていた何百ある光はふっと消える。暗がりから何か草の葉に露を落としながら、ひたりひたりと上がってくる。草を踏みつける軽い足音。夢と現実の境が、再び霧が濃くなってくる。

第二十五話

撫子の香が仄かに漂う。

隣に蹲ったままの饗庭は、髪の緑に隠れて、その様相は解らない。不吉な予感だったが、それは、もうとうに前、街に入った頃から継続している。

「大丈夫ですか」

小声で囁くが、返事はなかった。

足音はどんどん近づいてくる。濡れた指で露地の土を踏む音、規則正しく、二人へと向かってくる。噫せる花の匂いに直継は酔った。酔おうとした。

何が現れても、理性で考える隙など与えてくれないのだ。

姿を見せるは子供ほどの人影。白緑色の長襦袢に韓紅の薄物を重ね、百合の花をあしらった、浅葱の帯を巻いた細腰に、帯留は翡翠と鼈甲の細工。黒曜が融けたような、鬢は、結わずに胸まで垂らし、其処から滴る露は真珠のように足元を鏤める。その妙なる色合わせ、膚の輪郭を幽かにし、俯く瞳からは零れるような瞳。

直継は饗庭を庇うように立った。饗庭は放心したように動かない。市松人形だ。しかしその面立ちは、青年が話していたような恐ろしげな形相でもなく、青年は似ていると言ったが、直継の目には、店で売られている『市松さま』と変わらないようだ。のっぺりとした陶器の肌。硬質な唇。赤く筆で引いた唇は、作り物に過ぎず、欲望や愛や悲しみや怒りなど有しない何の感情の欠片もない、カラクリ人形に見えた。

人形は饗庭を抱えるように抱き締めた。短い腕を回したのだ。直継の体は、間接はぴくりとも動かなかった。

すると其処に、二人を包むように現れるものは――。子供の身丈しかないはずなのに、成人女性の如く大きく見えた。違う。二つの影が、一つの大きな影を成すのだ。

その黒い影は饗庭が立ち上がった姿にも人形の姿に見えた。その顔貌は、青年が憂えていたように顔に瓜二つ。

作り上げられた虚像は、慄然と美しい女。或いは人形が見せる幻覚。或いは人形自身。女の幻影は、すすと手を伸ばす。直継と幻影の間を隔てるものは何もない。

その時、ポケットから白いハンカチがひらりと宙を舞って、二人の間に落ちた。白く張り詰めた冷たい空気が波がひくように、すうと引いていく。

洋館の庭で拾ったものだ。このハンカチを追って来たのか。

「ハンカチを拾って下さいましたね。貴方から戴いたハンカチで御座います。覚えてらっしゃいますか」

腰ほどしか身丈はない実体にも関わらず、すらりとした背の高い女の幻覚は、声を出した。界限全体に轟く割れ鐘の音の如く。辺りは濃霧が立ち込め、音は霧の中に消え入る。ふらりふらりと宙に浮くは、先程の蛍のような火の玉。

「貴方が下さいましたハンカチです。縁に刺繍のある、美しい。あけれど夢のようですね。こうして長い間待ちますと、恋しい懐かしい方にお会いできるもので御座いますね」

直継は女の容貌に見蕩れていた。魔物と解っていても、引き寄せられる。

「けれども私、心の何処かで、いつか貴方が向えに来てくださると信じておりました。約束なぞしませんでした。でも貴方と心が通じていると、勝手に思い込んでおりました。貴方の心はとうに離れてましたのに、幼い限りですわね。医学士になられた時も、軍に所属された時も、自分の事以上に誇らしい気分一杯で御座いました。捨て置かれたのだとは微塵も思いませんでしたわ。でも貴方は帰って来られませんので、私との幼い娘時代の約束なんて忘れてしまわれましてしょうか、気を病みました。私、自分の思い込みが浅はかだと、恥ずかしくて、いつそ死んでしまおうかさえ。と思えば、何か事情が御在りだったのかと便りを待って、毎日毎日厭きもせず

戸口に立っていたこともありました」

「私は貴女の恋しい方ではありませんよ」

思いがけなくも、振るえず声に出して云うことが出来た。しかし、女は莞爾とするばかり。

「恨み言を申し上げているのでは御座いけません。只々、聞いて戴きたいんです。お笑いになられてもよう御座います。今、お会いしてはつきりと解りましたわ。貴方を愛しているのだと勘違いしておりました。違います。貴方に対して、もっと漠然とした、愛のような悲しみのような慈しみのような恨みのような、全ての絵の具を絵皿に入れて溶かしたような、そんな感情を持っているのでございます。貴方、怖がっておりますね。女の情念など、思っておられるより脆いものですわ。男の方など、ふっと火の中に捨てられますわ。風で飛ばしてしまいますわ」

女は澄んだ顔で笑んだ。魔性だから幻影だからこれほどまでに美しいのか、そんな事を考える余裕すら、直継に生まれていた。逃れる事の恐ろしさと心の余裕は表裏一体のよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339a/>

霊犀

2010年10月16日11時02分発行